中村欣一郎市長の

山椒（さんしょう）は小粒（こつぶ）でも…

Vol.4

たった15分のボランティア

いくつになっても注射されるのは嫌なもの。お医者さんが注射器を準備しているのを横目に、腕まくりをして待つのはあまり気持ちのいいものではありませんね。

そんな私が献血にはまったのは20代前半のころ。東京の新宿駅西口の献血バスでした。何となく気になっていた〝献血〟というものに、誰に誘われるわけでもなくフラッと立ち寄ったのがきっかけです。初体験の献血そのものの覚えは特にないのですが、バスから外に出た時に「世の中のためになった～」という達成感というか解放感みたいなものが感じられ、帰り道に「やった～」といった高揚感に浸ったのが思い出されます。

今、三重県は10代20代の若者の献血率が全国47都道府県で最下位なのです。それもダントツのビリ。

県議会の頃には「知事、なんとか最下位を返上しましょう」と何度か訴えかけました。そのかいあって、今では高校へ献血バスが行ったり、理解を深めるセミナーが開かれる回数が飛躍的に伸びてきたところです。とはいえこれもあくまで種まきの段階。息を長く地道に続けていくことが求められています。

一方で、これまで献血してきて感じること、また経験者と接してきて思うことがあります。それは皆一様に言うことで、大げさに聞こえるかもしれませんが「世の中とつながった感」「自分も社会に貢献できた感」があるということです。

鈴木知事の提唱する「アクティブシチズン」というのがあります。これは、自立した市民が仲間や地域のために自ら考え行動することに幸せを感じるというものですが、私は献血はこのアクティブシチズンへの入り口のひとつではないかと考えます。世の中にはたくさんのボランティア活動がありますが、献血は最も費用対効果の高いボランティアのひとつだと思います。

身近なところでは、市民文化会館やハローに年に何回か献血バスがやって来ます。

また、ミタス伊勢には献血ルーム〝ハートワン〟があり、こちらはすべての成分を献血する全血献血以外に、血小板または血漿の特定成分だけを献血する成分献血も可能です。

ちなみに、鳥羽では10月16日に市民文化会館で献血があります。

では献血会場でお会いしましょう！

まもなく200回表彰です

※献血するには、年齢・血圧・体重のほか当日の体調など条件がありますので受付でご相談ください。

人権文化の花を咲かせよう

Vol.162

教育委員会生涯学習課 ☎㉕1268

「人に支えられて生きる」

私の知人に教員で部活動の指導に情熱を傾けていた人がいた。優秀な選手を育てるだけでなく、心優しく人に接し、自分に厳しい生き方をしていた。また、そんな生徒を育てようとした。練習はたいへん厳しかった。そんな彼が、視力を失い、筋力の低下を余儀なくされる病に襲われた。運動能力に優れ、誰の助けもなく何不自由のない生活を送っていた彼であった。結局彼は教員を辞めることになった。

今までの生活と違うもどかしさ、視力を失うことによって自らの生き方を変えざるを得なかった人生。苦しくなって初めて人の心の温かさがわかったという。彼が今まで他人に伝えてきたことがあった。「物事から逃げないこと。努力することの大切さ。思いやりを持って人に接する、相手を大切にする生き方。仲間づくりの大切さ。」これらのことを教えた子たちから支えられることを通して、実感として学ぶことになった。彼が今までに他人に与えてきた生き方は、彼に再び生きる力を生み出させた。

彼は津軽三味線という未知の分野にも挑戦。音声メールで自分の思いを伝達するようにもなった。失ったものも多いが、失うことによって得たものも多いと彼は言う。家族の優しさ、人の温かさを今まで以上に感じていると。彼が今まで他人に接してきた生き方が、巡り巡って、再び彼に生きる力を与えたのだと思う。逆境にあってその深い意味を感じる。

「私に何かお手伝いできることはありませんか。」「これを助けてほしいのです。」

困っているとき、助けて欲しいとき、お互いの弱さを出し合える、見せ合えることでつながっていける世界・・・

今心のつながりが大切なときにきているのではないでしょうか。